

會



報

1962年2月

219

日本山岳会

オスカー・ハウストンと チャールズ・ハウストン

吉沢 一郎

東京へ帰え
て間もなく、
チャールズか
ら手紙が来た
十月の二十六

ニュー・ヨークからサン・フランシスコに向う時、余程コロラドのアスペンに下りようかと思つたが、他にも一寸事情があつたし若しハウストンがいなくて迷子にでもなったら大変だと、到々アスペン立寄り止めてしまった。これについては帝国ホテルでチャールズに会った時、何故寄らなかつたかとえらく残念がられてしまつたものだ。そういえば万障繰り合せても寄つて来た方がよかつたなと今更くやんでも後の祭り。もっともお父さんのオスカーさんの方にはニュー・ヨークの山岳会の本部で会うことが出来た。

九月の十九日の夜、マンハッタン島のセントラル・パークに近い静かなAACのホールで約四十分間ブカヒルカ北峰初登頂に関する講演をやつた時、オスカーさんはお年にも拘わらずわざわざやつて来て私の話だけ聞いて帰えつて行つた。その時、来月下旬に日本へ行くことになつてゐるから又会いましょうといつて別れたわけだ。パークレーのファークハール老とクリンチのところ寄つてから

に東京につくと。私はその夕方帝國ホテルに電話をかけて、彼のいることを確かめてから彼等を訪ねた。チャールズはとても喜んでくれた。到々二十何年目に会いしましたねと。

私は彼が一九三八年にK2へ行った時からずっと文通を続けていたが、写真でない彼を眼の前にみるのは今度がはじめてだった。彼のK2の記事を「山岳」に紹介したことがあるが、その時に出した写真は皆彼がそのために私のところへ送つて来てくれたものである。オスカーもチャールズもアラスカン・フェイムであるが、一九五〇年にネパールが鎖国を解くと、イの一番にそこに入つたのが二人で、ウェスターン・チームがエベレストへの登路として可能かどうかを調べに行つた。痛くない腹を探られるのが嫌なのでティルマンを招いたのだと先日の三井本館での会合の時に洩らしていた。

その十一月十五日の日は、奥さん、お母さん、娘さんは松方氏の家で招待し、残りの男性二人は交野マッキンレイ氏の肝入りの三井

の高級食堂へ来てくれた訳だ。日高、楨、松方といった三役さんの他に十二名集まつた。三役さんは向うのいうことがよくわかるとみえ適切な応待をしておられた。流石に年と経験の効だろう。辰沼ドクター、西堀原子力氏等、夫々自分の商売の方へ話を引張り込んでいたようだ。私は今度のアンデス行では高山病や肺炎のことで彼のアドバイスをうけていたが、今日のことを機会に今後チャールズが日本山岳会との結びつきを一層深め、その研究（高所医学）の成果をわれわれに提供してくれることを切に望むものである。

尚、ハウストン一家は十一月十八日にノース・ウェストで帰国した。（三六・一一・二三）

十一月十五日、交歓会出席者
楨有恒、松方三郎、日高信六郎
近藤茂吉、西堀榮三郎、辰沼広吉、加藤泰安、小林義正、島田巽、田辺寿、松田雄一、交野武一、折井健一、山崎安治、吉沢一郎（順不同）

ガルツェン遺児 募金ごあいさつ

謹啓 歳晩の折柄ますます清祥のこととお慶び申し上げます。さて、去る八月、ガルツェン遺児援助資金募集を企て、皆様のご同情をお願いいたしましたところ、各位の多大なるご支援を得て三六〇件、金九拾七

万三千五百六十四円の予期以上の観金を得ましたことを厚く御礼申し上げます。つきましては末尾別表の通り決算いたし、金九十二万三千六百一十一円也を在ダージリンの未亡人ベンバ・リータさんに送金いたします。早速政府の許可を得ました上、駐日印度大使を煩わし伝達方をお願いいたしたく考えております。ここに幾重にもありがたく御礼を申し上げ併せてご報告申し上げます。

ガルツェン遺児援助資金収支決算報告

収入の部
一般 附
（二二二件）：五五五、六〇九円
日本山岳会員寄附
（二〇〇件）：二〇三、八七〇円
ヒマラヤ登山隊員寄附
（三八件）：二〇三、五〇〇円
銀行 利 子：七七円
合 計（三六〇件）：九七三、〇五六円

支出の部

事務用品費：一、七四五円
印刷費：二、一三〇円
通信費：七、四四〇円
交通費：一八、九四〇円
合 計：四九、四四〇円
差引送金額：九三、六一二円
昭和三十六年十二月二十五日
日本山岳会内ガルツェン遺児援助資金募集委員会
委員長 楨 有 恒

ガルツェン遺児援助資金について

会員並びに一般の多くの方々から締切期日までに三六〇件（一、〇〇〇名余）、金九七三、〇五六円也の観金を得ましたので募金経費を差引いた金九二三、六一二円（九三、六一二円）也を一月十九日、駐印松平大使を通じて未亡人ベンバ・リータさんに伝達方をお願いいたしました。なお、一月二十日に休協記者倶楽部に於て横委員長より対外的報告があつた

法政大学山岳部 三十五周年記念 式典の報告

角 田 吉 夫

去る十一月十一日(土)の午後三時より千代田区富士見町の私学会館において、法政大学体育会山岳部の創立三十五周年を記念する祝賀の式典が開かれましたので、その概要をお知らせいたします。

当日の出席者は来賓として日本山岳会理事太田敬、東京支部委員野田三郎の両氏をはじめとして、日本山岳会学生部より二名、関西大学山岳部より二名、法政大学山岳部の前部長である田部重治先生と桂田利吉先生、学校当局及び体育会の各部委員等十五名が参列され、山岳部のOBの集りである山想会々員三〇名、現役一六名が参加し、合計六一名の出席者でした。祝典は洋式でビールを汲み交しながら運ばれる、簡素なものではありましたが、主催者側の挨拶について来賓の祝辞や山想会員の懐旧談、山岳部主将よりの部の三十五年間の歩みや今後の抱負希望などの開陳が行われ、最後には校歌と山岳部歌「吹雪は叫び、たそがれ迫る……」の合唱が行われ、大

変なごやかな、かつ印象の深い会合でありました。

日本山岳会理事太田さんの御挨拶は法政山岳部の三十五年の長い歩みについての敬意の表明と日本山岳会学生部の一員としての今後の登山に対するたゆまざる研鑽と協力して前進することを強調されました。

山岳部の初代の部長であり、長い年月、私達を指導された田部先生のお話の中には、自分は今、山岳部の年寄りの中で、冠、武田君に次いで三番目であるという発言にはじまり、日本の山々への深い愛着をひききされ、八千尺以上の山はどれだけあるか、これらをつ一つ踏みしめ味えば、一生かゝっても登り切れるものではない。ヒマラヤばかりを目標とするのが山登りのすべてではないという。日本山岳礼讃の御意見で、なかなかお元氣な姿でした。

桂田利吉先生は終戦後いち早く悪条件の中を山岳部の再建に努力を傾注された山岳部長であります。その間の数々の苦心談や谷川岳の遭難事故(二六年五月、一の倉沢にて四名死亡)を語られ、又近き将来、山岳部として未経験である海外の山々への遠征についてその実現を強く希望されておりました。

レルヒ少佐の プロフィール ☆ 廣 本 賢 齋

奥の細道 参謀テオドル・フォン・レルヒ少佐が見学のため高田五十八連隊(新潟県)に配属されたのは、今から丁度五十年前の明治四十四年一月であった。少佐は六尺豊かな長身に鼻眼鏡をかけ独逸風的美貌を蓄え、壮齡四十一歳といふ威風堂々たる偉丈夫であった。レルヒ来越当時、私は伯爵清棲家教知事の下に、知事官房秘書兼通訳の端役を勤めて居た。その年の五月廿三日、レルヒは知事閣下に敬意を表するため単身来訪した。其の晩清棲知事主催の下に、鍋茶屋(新潟市第一流の料亭、現存)でレルヒ少佐の歓迎会が催された。その席上少佐の希望により、通訳兼案内役に仕立てられたのが、この私であった。これが「岩越旅行」(岩越旅行の単行本あり、明治四十四年発行、岩越岩代、越後、越後の村松連隊より

会津若松市の白虎隊の遺蹟をみる往復旅行途中、磐梯山を登る。四十四年五月二十五日より三十一日までの旅行見聞記)を始め公私交々少佐との接触の第一歩であった。

旅は道づれ世は情けで、寝食苦楽を共にする旅行と云ふものほど人を親密にするものはない。数度の往復交渉の末には、少佐は旭町の(新潟市)私の陋屋まで何度も来遊し、或時は余り話し込んでしまつて一泊した事もあった。が食事は兎も角、六尺豊かな体重二十貫の大男に敷かせてやる夜具には閉口した。毛布や座布団など何枚も重ねて漸く寝ぎをつけた。それでも豪放な少佐は大満足で寝息が高かった。

六月初旬、命により知事代理として少佐を高田市の高陽館に訪問した。刺を通ずると少佐自ら玄關まで出迎え、私を拉して階上の居間に伴い、序に各室を案内してくれた。玄關から階段を上ると突き当りの右が書齋で明るい閑静な室であった。床には古画の一幅を懸け、其前には蒼古な観音の木像が安置されてあった。卓上の種々の骨董類、書架の無数の書籍画譜など眼を見はらせるものがあつた。一泊を強いられた。

晩餐会には堀内聯隊長を招き、知事代理として私を紹介して、三

人鼎座の上、且つ食い且つ語り、殊に話題は岩越旅行に花が咲いた。フランス通の堀内大佐とレルヒ少佐とはフランス語で、少佐と私は英語で、大佐と私は日本語で、みんなブローケンで喋りまくって賑かであった。

佐度旅行は七月二十日より三泊四日の予定だった。高田日報へ投稿した紀行文は二日分だけで、後半の二日分が掲載されなかった。何故だったろうと「スキーの黎明」(四季社、昭和32・11・20発行)の著者(中野理、医学博士)が其の未掲載を惜しんでいた。

×

今靡げながら回想すると、第三日目には時の郡長、署長、鉦山長を歴訪、更に初代常山の釜場を訪ねて数種の無名異焼を求めて相川を辞し、真野御陵、根本寺、阿仏坊等の名所旧蹟を巡覧して、河原田に一泊。翌日は沢根に銅器匠初代琢斎を訪ねて、其の製作振りを鑑賞したり、主客三人で戯画俳句など交換したり、旅の終りの心緩みて、約半日を悠々と此所で費し常山、琢斎の製器と両氏よりの書画と、鉦山長よりの金鉦などを土産として、其夕方高田への帰途に就いた。(「スキーの黎明」の佐度旅行参照)

大兵肥満のレルヒは従つて足↓

私も部の誕生した当時の一員として、この三十五周年を迎えたいに感無量のものがありました。田部先生も同感のことと思っております。創立当時は今日のような学生会の組織もなかったので、山岳会の虎の門図書室が色々な研究や意見交換の中心となっており、他の諸先輩の御指導を受けたり、他の大学山岳部、早稲田や慶応、一橋、立教など学校出部部の連中と話し合うのも、あのルームが中心でした。

昭和十年の十月に法政山岳部の十周年記念晩さん会を赤坂の幸楽で催したことが想い出されます。

当日は高頭さんや木暮さん、それに田部部長を中心として、先輩の山の懐旧談を伺ったり、なかなか盛会でした。

山岳部が今次の大戦による影響は、いずれの学校山岳部でも同様に大きな空白時代があったことではあります。二十一年の春には部が再建され、恒例の三峰山新人歓迎会を行ったり、五月の谷川岳合宿、夏の千丈沢合宿など、当時の悪条件の中を、なかなか早く、立ち直ったのです。桂田部長はじめ当時の部員の苦勞と努力には敬服をしております。

この間、部報「山想」は戦前に

四冊、戦後は二十七年にVI号として五冊目を刊行しております。この号は昭和八年より戦前戦後を通して、約十四年間の登山記録を蒐録したもので、幾多の冬山登攀記録と併せて、部として始めての遭難事故である谷川岳の遭難報告が掲載されております。かえりみて、学校山岳部にはと切れることのない記録の取りまとめと部報の刊行が望みたいものです。当面の課題としては「山想」VII号の発行の準備と、長らく研究を重ねていた海外登山への踏み出しであります。

OBの集りである山想会もこの長い年月を部と共に、分離ということもなく、歩みつけて来ております。現在会員数約一七〇名。

山岳会々員としてお世話になった田中菅雄や貴堂武時君など古い仲間を戦没或は病気で失ったことは心残りであり、四年間の山岳部の性格として、四年間の学業が終了すれば新しい部員に引継がれて行く、この型態においては部の生長が山想会につながり、経験と研究が蓄積されて、将来への向上と発展があるものと思えます。どうか今後とも日本山岳会の変らない御指導と御援助をお願いいたします。

↓も大きかった。警梯登山の帰途、驟雨に逢ってビシッ濡れになり、宿屋に着いて和服に着替えたり、その時足袋を買わせようとしたが、何処へ行っても十三文甲高はありませんと断られた。

会津（若松市）の理髪店でのこと、レルヒは突然床屋を椅子から突き退けて跳がり「ミスタ、ヒロモト、ヒロモト眉を剃られちゃった見てくれ」と泣きつ面！「ノウノウ眉はちゃんとある。日本では丁寧に眉の周りのムク毛も剃るのが定法だ、綺麗になるよ」と私が辯解すると安心して椅子に戻った床屋もホッとした。

レルヒは健啖家で日本食の味噌汁でも沢庵でも刺身でも大概の西洋人の食わないものでも食膳に上ったものは一品残らずペロリと平らげる。「君は大ま喰ひだな、羨ましいな」と云ったら、「大きい機械には油も沢山必要だ」と当意即妙！、だが「蛇と蛇の兄弟と魔の魚だけは嫌いだ。日本人はよく食うね」と度々云って居た。その蛇とは鰻で、兄弟とは鱈で、魔魚とは鯖のことだ。やっぱり毛唐である。酒も相当にやれたが、煙草は殊に大好き、食後と山登りの時に「実にうまいなあ」とパクパク。レルヒは頭脳明晰な博識家だった。他はさておき日本の古面骨董

等の鑑識力は素晴らしいものだ。聞けば渡日前から熱心に日本の政治、文学、美術、宗教など研究して居たとの事、宣なる哉と思つた。

フォンの付く上流の家庭に、名将の子として生れ、高い教養を積んだ少佐だけに流石に気品高く、素行も正しかった。気取らず高ぶらず実に立派な紳士であった。

翌明治四十五年一月には、レルヒは高田を去って北海道に転任。

私は其の四月県官を辞してアメリカに渡つて了つた。在米中に一度少将服の写真を故国から遙々送つてくれた。私よりの信書は何うなつたか。兎に角当時勃発の世界大戦に妨げられて相互の通信はここで途絶えて終つてゐる。（36・11）

（筆者の現住所、神奈川県足柄下郡橋本町中村原）

（編者あとがき）

・レルヒ少佐は一八六九年八月三十一日、ハンガリー国に生まれ、一九四五年十二月二十五日（終戦の年のクリスマス当日）永眠、享年七十七才。母国の前後二回の大戦禍に幾多の苦境を潜り、晩年「日独文化協会」の会長としての重責を負い、痼疾の糖尿と闘いつつ遂に世を去つた。・レルヒ少佐二女、ヘラー・ホリヤ一夫人（オックスフォード居住、54才）が昨年十一月十六日、高田市で行われた「スキー・登祥五十周年記念式」に「日本スキー連盟」より招かれ、亡父レルヒ少佐ゆかりの日本各地の足跡を巡訪したいという宿願を果すために来日、約三ヶ月の予定で滞日した。

・本稿の筆者、レルヒ在日中の通訳官、広本賢斎氏は、本年八十五才、明治三十三年東京専門学校（早大の前身）を卒業、のち北米に遊び、現在は郷里に自適している。靖州（せいしゅう）の雅号がある。

・「岩越紀行」は明治四十四年九月十一日、新潟市東仲通一番町、小林精華堂・印刷発行。奥国参謀少佐フオン・レルヒ、靖州広本賢斎共著。JCS5566本文九五頁、定価貳拾錢。題字は第58聯隊長堀内信水。・本稿の一切は、越後支部藤島玄氏にとりまとめたものであった。厚くお礼を申し上げます。（F）

本号目次

- オスカー・ハウストンとチャールズ・ハウストン……………一
- ガルツェン遺児募金ごあいさつ……………二
- 法政大学山岳部35周年式典……………二
- レルヒ少佐のプロファイル……………二
- 島本謙三……………三
- 岡野金次郎翁記念碑……………三
- 木暮理太郎の歌……………四
- 田辺和雄君を悼む……………四
- 年次晩餐会記……………五
- 図書紹介……………六
- 会務報告……………七
- 学生会の動き……………八
- 支部便り……………九
- 「山岳」編集余録……………一〇

◇お願い◇

会費の納入・ルーム、山荘資金への協力・會員カードの送付など、まだお済みでない方は至急にお願いたします。



久太・小島水 抄 譜 年

昭和 36 年

神奈川県立図書館

高野鷹蔵

此、十一月二日—十一日（昭和三十六年）横浜市にある神奈川県立図書館で「小島水展」なるものが催され、小島さんの著者の殆んどが網羅陳列され、私などは全く知らなかったものが展覧されて居り、表記の小冊子（全38頁）が作られていた。

小島さんは横浜市に在住した初代山岳人として、また文士とし幾多の業績を残した、云わば「ハマッ子」の代表と云う意味で此計画がなされたもので、同じくハマッ子の一人として、その故に私も其期間中の十一月四日に、とうとう引っぱり出されて「山の関係からの思い出」と言う題目で、一席小島さんの旧い関係を喋らされた。

此展覧、此年譜等の企画編集の一切は同館の主事、三森達夫氏の

精進によったもので、その努力には全く驚嘆をした。

実のことを言うと小島さんの周囲の事など、私などは山関係以外にはあまり知ってはいないのに、文筆関係やその他の点では、こんなこともあったのかと、驚く程よく調べ上げているには驚いた。実を言うと、この三森さんは山岳人でなかったで、小島さんの山関係だけでなく、客観的に見て行き得たので、却って小島さんの全容を捜し求められたのであり、他面既成の鳥水観もなかったで、却って成功を得たのかも知れない。仮に吾々山岳人が関係したら、山の小島さんだけに終始してしまつたかも知れない。海に意義の成果を得たもので、私たち旧友としても海に有難いことであつたと思う。

この三森さんは、美校の木彫科を出た人であり、小島さんを見る

目も亦、単なる編集的技術だけではないことは結構なことであつたと思ひます。

武田君（久吉）あたりからは此位の小島さんの年譜は山岳会同人で作るべきだとお言が出たが、全く汗顔の至り、しかし前言の如く吾々がやつたら、小島水年譜としたら、却って「山」だけになつて「鳥水」全容を示すことはむずかしかったかと思う。

明治六年十二月十九日、その出生からはじめて、年次的に逐次記事あり、中には私との関連事など「はて、こんな事もあったか」との昔におのれの事を忘れ去つたことなども書かれている。

明治三十八年四月十六日の項に「神奈川県（今の横浜市神奈川区）の神奈川県立小学校で、日本博物学会志会横浜市部の談話会が開催された。その席上「高山の動物及び植物」と題して講演した」との記事がある。

武田君や、私などは勿論関係した事柄であるが、山岳会創立の直前の事であり、いまだに小島さんの若かりし頃（三十一才）の姿を思い浮べ得られる。何処からこんな年譜を捜し出したものかと思われてならない。

前に書きました通り、去る十一月四日に小島さんの思出話をさせられました。くさぐさの旧い話の内、山岳会初期の頃、私の横浜の旧居に事務所を置いた時分の話が出ました。

山岳会がウェストンさんの肝煎りで、英国のアルパイン・クラブにその範を則つとり、山岳会の英訳名も「The Japanese Alpine Club」とつけたくらいであり、本来英国のそれはクラブ組織でありましたものの、さて日本の山岳会はそのなわけにも行かずに永い年月を経て、漸くわれわれの後の皆さんによって、虎の門にルウムが出来て、はじめてクラブの物真似も出来たわけではあります。その当初の頃は、実の所、私の生家の先祖からの商売は、宿屋と運送屋と云うサービス業ですから、人様が集まるには至極便利なわけでした。だから自然と同人の間には一種のクラブ体制が出来ていたわけですが、集まれば、古い日本人的のやり方で、先ず一風呂あびて「めし」と言うことになりました。

小島さんの勤務先の正金銀行は私の家からは町角を曲って直ぐ、二丁も離れた所ですから、すぐ召集令が出ますが、幾度私の所に来たかわかりませんが、ついぞ一★

第十六回国体登山部門

十六回国体登山は十月八日から十三日まで秋田県の駒ヶ岳と八幡平を両軸として行われ、全国四十六都道府県から選手監督各五名、ほかに役員数十名総計三百に余る参加者が、秋田市で開会式、田沢湖町の生保内へ入山式をもつた後、五隊にわかれて山に入り、八幡平村に下りて閉会式を挙行した。二日目に台風二十四号が襲来し切角今度の大会を機として開かれた駒ヶ岳から八幡平にいたる全縦走路をフルに使用することが出来ず、一隊だけ稜線で苦しいテントの一夜を過ごした。

関係町村いたる処素朴で心あたたまる歓迎をうけ、岩手岳連は駒ヶ岳まで登り歓迎して呉れた。

日本山岳協会の武田会長のほか副会長の尾関日本岳連会長（初日のみ）と日高が参加し、大会委員長と技術委員長は国体を担当する日本岳連の高橋定昌、羽賀正太郎の両者がつとめ、本会からは後藤、伊藤両支部長はじめ可成りの参加者があり、実施を受持った秋田岳連では本会員の荒巻会長と保坂副委員長が中心となつて骨を折り一同から感謝された。

（日高記）

★度皆んなど、共々お風呂に入ることがない、奇妙な事実があるのでした。私にとっては、吾家の七不思議の一つと言っても言うものでした。

お若い夫人姿の婦人が席を立たれて、
「私は小島の末の娘ですが、今日のお話があるので伺いました」と言うわけで、俄にお話の興味が湧き出て、復た一くさりお話が延



＜写真説明＞ 杉並区阿佐谷の小島烏水邸の亭にて、左から高野夫人、高頭夫人、小島夫人、高頭仁兵衛、高野鷹蔵、小島烏水。年代は昭和7-8年ごろか、英京ウエストン師の許へ送るためにというので撮影したものである。高頭、小島両氏の和服の襟に JAC の略章が見られるのが珍らしい。（高野鷹蔵氏提供）

たまたま今度の「烏水展」での私の講演会でも、その話を持ち出

しましたが、話が終ってから、来会の方々からのお賀ねに、復た話題を重ねていますと、席の中から

びました。

この小島さんの末のお嬢さんの結婚式には私達も列席したのですし、且つ横浜に住っていられるこ

とを知っていたのですから、見忘れてしまった次第で、モウロクの然らしむる所と汗顔の至りですがその時、そのお嬢さんの説明によると、「父は家にいても、お風呂から上ると、着衣一切、母が介添えしないと着られない人でしたから、多分、お宅へ伺ってもお風呂へ入ると、あとで独りで衣物が着られなかったからでしょうか？」と、それこそ五十余年來の私の家の秘密が解きほこされたわけで、洵になごやかに、小島さんの在りし姿を思い浮べることが出来ました。

此、三森さんに小島さんのお墓は？と聞かれて、大あわてに慌てたほど、戦後のドサクサに紛れて大先輩の墓所も知らなかった私こそ冷汗ものでした。

・東京の小石川の富坂（トミザカ）（春日町から伝通院前に登る坂）を上り切って左折、
—常泉院の納骨堂—
法号、照光院寿岳久道居士

富士山や丹沢山塊は、時に見える？かも知れませんが、所詮は眺めは乏しいと嘆じているでしょうが。

この「烏水・小島久太年譜抄」は、会の図書室に送っておきまし（三六・十一・二三）

小島烏水展

小島烏水展が十一月二日から十一日まで横浜市紅葉ヶ丘の神奈川県立図書館で開かれた。横浜の生んだすぐれた登山家であった烏水の業績を顕彰するためのもので、とくに今回の展覧会では、登山家としてばかりでなく、文学批評家であり、紀行文家であり（文庫派）また浮世絵や泰西創作版画の蒐集研究家としてその方面にも大きな足蹟を残していることにもあわせて重点が置かれているところが、異色であった。

陳列品は齊藤昌三氏所蔵のものを中心に、烏水の作品はほとんど網羅され、各版別、異本が全部集められて、まことに見ごたえのある貴重な展覧会であった。十一月四日には高野鷹蔵氏の「山の関係からの思い出」十一月十一日には齊藤昌三氏の「本の関係からの思い出」と題する記念講演があったが、折あしく小生はききもした

なお、この展覧会の資料として同図書館主事三森達夫氏による「烏水・小島久太年譜抄」、「近代登山のバイオニア・小島烏水」（神奈川文化一九六一年十月号）の二つの労作が発表された。まことにくわしく烏水の生涯を伝えており貴重な文献である。（山崎安治）

岡野金次郎翁記念碑

小島烏水の山仲間であり、山岳会設立にも深い関係のあった故岡野金次郎氏（山岳第五十三号参照）の記念碑が平塚市湘南平に建設され、昭和三十六年十一月十三日除幕式が行なわれた。富士、箱根、丹沢の山々、一方には相模湾からはるか三浦半島まで見渡せるまことに眺めのよい場所に、上半身のリリーフ、碑文、略歴が銅板ではめこまれた見事なもので、リリーフは亀貝保氏作、碑文は平塚市長戸川貞雄氏の手になり、

「山を愛し、山をたのしみ、生前平塚に住み、平塚で終った日本の山岳界に於ける先駆者岡野金次郎翁をしのぶ」としてなされている。除幕式当日は北風の吹く寒い日であったが、翁の曾孫小永井透、岡野健両名により除幕され、玉串がささげられて、碑文と略歴の朗読があり、記念碑建設の動機を作られた齊藤昌三氏のあいさつなどで式をした。また十三日から十九日まで平塚市図書館主催で平塚信用金庫三階において岡野金次郎翁回顧山岳展が開かれ、翁が生前愛用していた杖や水筒、はばきゲートルなどの遺品や、書簡、日記などが陳列され注目をあつめた本会からは日高会長と山崎が参列した。（山崎安治）

木暮理太郎の歌

木暮先生の和歌をあつめて「山岳」の雑録か「会報」にでものおこななければならぬと思ひ、昭和二十八年頃、木暮末亡人におねがいして、わざわざ原稿紙に列記していただいたのであったが、つい今日になってしまった。

その理由は、先生が明治三十八年頃に編集された「ハガキ文学」という月刊あたりで、本名や城南生などという名を使われて、さかんにいろいろの文章をかかれていたので、こんなものや先生のノートなどを拝見して、なるべく多くの歌をあつめてからにしたいと思つていたのであった。それは、いただいた歌の原稿が「にひばり」という先生の人られていた短歌誌からのものばかりであつたからである。この会報は昭和八年から昭和十四、五年までつづいたもので、都立京都市の職員や一般の人々が参加している流派にこだわらぬ歌愛好家の会であつた。先生の歌はこの「にひばり」に出されるためにこの道に精進されたといつた方がよいのではなからうか。したがって代表歌といえど勿論、ここに集められたものが一番よいと思つてゐる。

したがって「山の憶ひ出」を出された頃が一番、和歌には油ののりきつた頃であつたと思われ、私もよくその頃は万葉集や新古今集のお話をうかがつたことも思ひ出される、先生の著書を読んだ方は必ずといってよいくらい和歌を添えてあることによつてもわかるのである。私のいただいたものは「山とよむ雪崩の音も今日あたり」が書かれてあつた。この歌は先生も好まれたらしくほかの人への本にもたびたび記されているのを見ている。これなどはいわゆる先生の持ち歌の一つなのである。

私の知っている古い歌としては昭和二年十月三國山紀行のとき、法師温泉の主人にせがまれてつくられた「三國山眺めは飽かすその溪の法師のいで湯わすれかねつも」などである。

過日、ひさしぶりに山岳会の土曜会に出たとき会報編集子から木暮先生の山の歌の原稿を見せられ、加筆を求められたので、不明文字の訂正と十数首ほど追加することによって、その責の一部を果さしていただいたわけである。

(小野 幸)

昭和八年五月「にひばり」創刊号
淡雪の雫

野宿すと沢に下ればおほつかな河原の砂に熊の足あと
湖をめぐりしげれる岳樺の木むらとよもし駒鳥啼くも
ほがらかに駒鳥啼きぬ朝霧のはれなんとする雪の溪間に
風すさぶ霧の高原岩蔭に咲く富士桜見ればかなしも
真昼だに日の影ささぬ溪あひの雪降のあとの草の芽だち
よ

落葉松の若芽けぶりて小雨ふる峠路ゆけば山鳩啼くも
日もささぬ朝の谷間の雪の上にかもしか立てりわれを見
つめて

いたどりの広葉ゆるがしさと吹ける雪の溪間の屋の風は
も
わけ登る榎松の原にのたありて鹿は遊べり車百合咲く
淡雪の雫したる榎の木の木ぬれづたいにみそさざい啼
く

昭和八年「にひばり」六月号
春 雑 詠

ほの白く夕靄こむる川の瀬に魚跳ぬる見えて河鹿鳴く
名 栗 川 三首

十あまりうぐひ釣り得て帰るさの手を洗ひ居れば河鹿鳴
くなり

引き上ぐる魚籠水噴きて跳ねはぬるうぐひやまめの十あ
まりいつ、

沼にそぐく小溝のいくつ日もすがら岩魚すくひて飽かざ
りにけり

尾 瀬 八首

水無月の照る日の下に白き花原を埋めて水芭蕉咲く

咲き初めて日もあらなくに白き花雪解の跡の尾瀬に

鳥啼かぬ原は淋しやたそがれて至仏が嶽に夕月かゝる

沼隈の黒木の林しみさびて石楠の花いま盛りなり

雪残る燐が嶽のいる澄みて水とり沼に啼きしきる朝
水の面掠めて低くかいつぶり静けき沼の黄昏に飛ぶ
尾瀬に来て此処の鎮めと仰ぎ見る燐が嶽の姿よろしも
忽然と地より花の湧きしごと葉もなき花や水芭蕉咲く

昭和八年「にひばり」八月号
熊の歌

谷沿ひの大虎杖の若き芽を喰みあらしたる熊の居るらし
(恵 振 谷)

このあたり熊かも棲める針路は喰みあらされて小さき花
咲けり (燕 巢 山)

鈴羊の棲ぞと案内者が笑ひいふ大木の洞は熊の穴かも
(黒 部)

三 宝 山 三首

木むらなし若木しらし立つところ熊の糞あり白檜の林
何ぞこれはとしたり顔にも問う友に案内者答ふ熊の糞
熊の糞もろてにささげ案内者に友は問ひけり笑はれな

中 尾 峠

真昼時うゑたる熊が樹にのぼり木の実はみ居り追へども
去らず

仙人 尾 根

屋敷する水を深すと大いなる熊の腹匍ひねて居るを見し

鬼 怒 沼 原

よべ降りし霞は熊の足跡を白く見せつゝ消え残りたり
越路なる法師の湯より熊とれつ葉ぞ食せと肉送り来る
冬あさき杉の青葉に包みありてこの熊の肉よ赤黒く見ゆ

余 詠

「やぐら」とは熊の樹上に作った木果の貯蔵をいふ
そこなくけものゝ匂ひ漂へる深き谷間に見し熊の穴
熊のゐるけはひもしるき虎杖の中を分け行くいぶせきと
離れて双眼鏡に覗き見る榎松原の熊のよろしも

昭和八年「にひばり」十月号

黒部川きりきしの根に温泉湧き澄み湛へたり岩のま洞に
黒部川空をとよもし地にこもり湯槽なす大岩の向ふを流
るゝ

蜷座の星の輝きいちぢるく川音高し明日は雨ならむ

うるさくも寄りくる蛇を打ちころし心たらひてまた湯に入るも

陽のさせば谷のなか空群れて飛ぶ蜻蛉の翅のまなく光れり
この日ころ朝夕にたつ温泉のけむりや白くして秋ならむとす
時をりに舞ひ込む落葉湯上りの肌に吸ひつき離れぬもあり

百貫山に登る

うろこ雲高くかゝれる谷室の北に開けて日本海見ゆ

南アルプスにて

山なみは東に欠けて見劣りぞすると思へるそこに富士あり

昭和九年「にひばり」八月号

奥秩父釜沢行

谷木々の青葉が上にそゝり立ちただに真黒き鶏冠大尾根

(鶏冠山遠望)

東 沢 六首

この谷のうまし檜を伐り出すとトロ道作る世とはなりぬ
久しくも見ぬこの谷の石楠の花の盛りにあへり今日はも
夕闇の汀に下りてもの洗ふ友の手先ぞやゝ白く見ゆ
粧岩のうす黄の肌にはのぼりと夜ふけてのぼる月のさし
をり

荒き瀬に杣人のかけたたる丸木橋やゝ長ければい行きわづ
らふ

初夏の谷の一日を小屋にねて雨に暮せばわびしくもある

釜 沢 五首

高廻りしつゝ瞰下す石楠の花間に瀬の青く光るを
高廻り五十米をのぼり終へて自己陶醉の快感を味はふ
腹匍ひて手がかり探す岨崖に小岩桜の花咲ける見ゆ
舟底をかたむけしごとと逆落とすこの荒岩の岩ねてゝしも
おのがじし丈伸びきそふ山木々のついにところを得たる
よろしき

甲 武 信 二首

ほこりにかき昂ぶる若き日のこゝろ蘇り来も頂に立てば
甲武信岳八千尺の峯頭に立ちてわが思ふ永遠の命を

破 風 頂 上

霧しばし霽れて乱雲たゞよへり遙に高く富士が根は牙ゆ

雁坂峠を下る

下草に篠の茂りて掬の木の林となれば鶯の啼く
下むきて葉はまきたれば石楠花のつぼみあらはに春まつ
あはれ

破 風 小 屋

水汲みて友はかへらむ火を焚くとたけど燃えなくぬれ木
ぬれ土間

西破風の小屋にねさめて鳴り騒ぐ笹の音聞けばうら淋し
かり

昭和九年「にひばり」九月号

釜 沢 行 (二)

途 上 所 見

敷き捨てゝ幾年かへしトロ道のレール赤錆び山は禿げたり
朝いまだ雲湧かぬ谷の空すみで一痕下弦の月白く見ゆ
溪のくま崖の高みゆとりどりに咲く石楠花の木振りおち
恐ろしきおひての手より逃れたるこゝちに見上ぐ今下り
し崖を

瀑しづき吹き上ぐる崖に枝垂れ咲き色あさやけき石楠の
花

音たてず常滑走る疾き瀬のすはや懸りて瀑となりぬる
かち渉る足のはこびのおぼつか常滑走る瀬のつよくと

破 風 小 屋 二首

水汲みて友はかへらむ火を焚くとたけど燃えなくぬれ木
ぬれ土間

西破風の小屋にねさめて鳴り騒ぐ笹の音聞けばうら淋し
かり

西破風頂上にて 四首

雲天に山河地に湧き渾沌のむかしおぼえて山の朝あく
梅雨晴れの崩れしるしも眼下の谷雲を吐き雲山をのむ
今か雲頂掩はむ遠山に残る雪見ゆ赤石ならし
ますらをの生の命にかけむとはわが思はなくに登山やめ
難し

雁坂峠を下る

雁坂の峠路長し下り来て滝川谷に聞くは筒鳥

栃 本

栃本の宿の風呂場の窓見ゆる甲武信ヶ岳は夕曇りせり
常滑の河床つゞけば迅き流れ右ゆ左ゆかち渉りゆく
ひた登り朝露浴びて山のはな登りはてたる心すがしも
あさやけき花のくれなる濃みどりの葉にかがよいて石楠
は咲く

昭和十年「にひばり」四月号

四月、三國山に遊ぶ

山とよむ雪崩の音も今日あたり名残と思ふ峽に入り行く
吹雪雲よこなひく上に突り峰のなみ立ち白き耳二つかも
耳二つ月夜野橋の上ゆ見て登らなと思ふ幾とせを越し
山の上に吾ひとり居る静けさの時へにければ雪崩はきこ
風吹けば粉雪さばしるさらさら寝雪の上をこ雪さば
雪の上を風に追はれてよるべなみ粉雪すがりきわが足も
とに

わが足をかぎとしたのむこな雪の散りて跡なし歩みうつ
せば

風の痕波にもくめに似る皴の雪にのこりて夕暮りにけり
山の上に吾ひとり居る静けさの時へにければ雪崩はきこ
峠路を人のぼり来もつれだつとまてばモンベはきたるお
など

カメラ据え見上ぐる山は雲来り雲去りゆきて空蒼みたる
乾坤を方寸の中にをさめたるカメラたたみてわれ山を下る
雪消の泡のよごれの葉に残る狸々袴はさ芽立ちて見ゆ

昭和十三年四月十三日朝

ま向ひにがつしり根を張る常念が窓に迫り来われ息をの
のしかゝる常念岳を仰ぎ見て現し身われのいや小さき

(以上、九十八首無断転載)



あさやけき花

80

川喜田壯太郎

田辺和雄君を悼む

深田久弥

早稲田大学アフリカ縦断隊長田辺和雄君が、ナイロビで病死の報知は、私には大きな打撃であった。一高以来私の四十一年の古い山友達であり、近年は気のあった稀少な話友達でもあったからである。

×

田辺君は本会員ではないが、木暮理太郎氏に私淑し、武田久吉氏から信頼され、その他本会の古い先輩たちとも親交があつて、昭和二年の第三十六回小集会では、冬の八ヶ岳について話をしている。当時はまだ冬山へ行く人の稀な時代であった。

×

そう言えば、田辺君は大正十五年三月に鹿島槍の積雪期初登頂の記録を残している。

前年の三月に爺ヶ岳へ東尾根によって登頂し、それで見通しをつけて翌年鹿島槍に成功したのである。それから大正十三年には赤石岳の積雪期登山にも初記録を作った。彼は非常に地味な性質で、吹聴がましいことを極端に嫌ったから、これらのことはあまり知ら

年次晩餐会記

山下一夫

一九六一年の年次晩餐会が、二月一日、文京区の茗溪会館で開催された。

当日は相憎くの雨天だったが、参会者九十六名という晩餐会始まって以来の盛況を収めた。

折井健一氏の開会の辞によつて、司会は藤島敏男氏にバトン

タッチ、日高会長挨拶のあと、長老の近藤茂吉氏の発声で乾杯、軽妙な藤島氏の司会に乗って楽しいクラブ的な話題が、次々に参会者の笑いを誘つていった。

×

当日の晩餐会は、一九六一年度エクスペディションの歓迎会をも兼ねていた由で、吉沢一郎氏のアドレス、篠田軍治氏のP29、川村大膳氏のアドレス、広谷光一郎氏のランタン・リルン、梶本徳次郎氏のジュガル・ヒマールと、これだけの遠征報告が淡々として語られたのも、日本山岳会らしい風景だったと言ふべきであらう。

×

当日出席の支部代表としては、信濃支部の小里頼忠氏、東海支部長の須賀太郎両氏が、支部の近況

や感想を述べられ、関西支部の藤木九三氏は、新聞人の立場から、新聞の登山界に対する功績をたゝえられた。

続いて頼さんから「ガルツェン氏の遺児養育費募金報告」があつたが、募金の結果は予想外に好成績だった由で、日本の登山人に特別の親近感を寄せてくれた亡きガルツェン氏に対して、せめてもの慰めになったと、一同大いに喜びあつた。

×

司会者の、「なにか面白い話を——」という希望に応えて、松方三郎氏は、「今年はまだことに妙な年だった」というきり出しで、六一年に來朝した世界の著名な山岳人との山での交歓を語られた。

「八月には、先ずサマヴェルを北八ヶ岳と富士に案内し、つゞいて十一月にはユードル長官の富士登山を設営し、休む暇もなくハウス・トン父子を迎えた。一年間にこんなに多くの著名人と日本の山を歩いたのは始めてだ」「サマヴェルが富士の山小屋に残したエベレストの素描は正に国宝ものだし、ユードル長官と富士の登山者との交歓は、首相との会談よりもはるかに日米親善の役を果たした」という極めて内容の豊かな、たしかに面白い話であつた。

☆



石井鶴三

会員通信

札幌秋信

望月達夫

九月二十三、四日の連休は、会員藤井、藤平、高沢の三君と糠平温泉からウベサンケヌブリヘ向う。相憎昨日まで晴れていた天氣が朝からの秋雨だ。大した降りではないので糠平川沿いの路を辿り、屋頂一四〇〇mの尾根にたつたが、雨は一向に衰えを見せぬのみか、尾根へ出るとやけに吹雪つけてくるので下山ときめた。途中で五〇m位の前方を横ざまにとびはねてゆく一頭のエゾシカをみとめた。

翌二十四日は、天候次第では然別湖へでもぬけて見ようかと言っていたところ、六時頃からチラチラ青空が見えたので、もう一度ウベサンケヌを目指した。昨日引返した一四〇〇mのコブまで登ると目の前に一六〇〇mの頭(糠平富士と俗稱するらしい)がたちだかり、糠平湖の彼方にはクマネシリの山塊と遙かに阿寒の山も見える。だ

が雲行きは早く西から薄黒い雲塊がおそってくる。

一六〇〇mの頂に立った頃、強い西風が驟雨を伴い烈しく吹きつけてきた。見る見るウベサンケヌの龐大な山容がかけされる。寒いのを我慢して四、五十分ハイ松の蔭で様子うろうろしていた三人は、今日も遂に頂に背をむけて下山の途につかねばならなかった。

×

今年十月七、八日に阿寒方面へ同業の旅行があつたので、丁度八日の午前がフリーだったので、幸い、一人で湖畔から雄阿寒岳に登って澄みわたった秋空のもとに斜里から大雪までの展望を恣にした翌九日は然別湖畔の白雲山からま近かにウベサンケヌや新雪の旭岳に接し、冬の近いことを知った。十五日の日曜も馬鹿によい天氣なので高沢君と二人、定山溪に近い神威岳、烏帽子岳へ行ってみた。二十一日から二日へかけてのヘルヴェチア祭へは、店の旅行で参加できず、藤井君だけが出かけた僕はカルルス温泉の奥のオロフレ峠まで若い連中と共に登った。後方羊蹄山が寒々として見えた。峠の近くはもう紅葉もおそろい頃だった。

二十一日の午後山崎春雄教授が亡くなりました。その知らせを金光氏から知らされたのは登別温泉でだった。翌二十二日夜のお通夜へは、ヘルヴェチアから帰ってきたばかりの藤井君と二人で馳せ参じた。伊藤秀さんも洞爺湖から急ぎ帰ってきたところだと云っていた(一九六一年・一〇月)

✓れていないが、日本登山史には逸してはならぬ記録である。

×

私の知っている限り、田辺君ほど山を愛し、広く深く山を歩いた人はいない。

彼は十数冊の手帖にその記録を丹念に書き残しているが、おそらくそれを見た人はその登山の数の多いのにおどろくに相違ない。それは殆んど全国に亘っている。中でも愛したのは白馬と八ヶ岳と尾瀬であった。

×

二年おくれで一高へ入った私はそれ以来田辺君から山についていろいろの事を教わった。今でも私の登山の根本の態度や精神は田辺流である。彼はど確実で細心で、しかも積極的意欲に富んだ登山者を私は知らない。お互い八十才までは山へ行けるナとよく語りあっていたのに、あとの二十年を私ひとり残して、彼はこの世にいないになった。悼むというより恨めしい気さえる。



☆深田久弥氏は、「最近ルームの図書係を引受けて整理に当たっているが、蔵書の貧弱なのはまことに

お恥しい。ぜひみんなの力で立派な山岳図書室にしたい」とよびかければ、三田幸夫氏は、「忘れられた日本の山を、もう一度見なおして欲しい」と極めて温善のある感懐を述べられた。

×

さて、めったに物事に動じない山岳会のお歴々を、ただの一言で戦慄させたのは、西丸震哉氏の壮行の挨拶である。彼はデカン高原の調査行を前にして、「レプラや風土病の感染は絶対避けられないから、当然罹病して来る」と意気軒昂たるところを示して、一同を噤然たらしめた。

最後にこの日の珍客ネパールのゴバル氏から、ネパールの国情や日本の感想が述べられ、終始楽しい雰囲気うちに一九六一年年次晩餐会の幕を閉じた。

×

△出席者

・一橋大学アンデス遠征隊(吉沢一郎・甘利仁朗・中島寛・中川滋夫・丸山則二) 関西学院大学ペルアンデス探検隊(川村大膳・南井英弘) 大阪市立大学ヒマラヤ遠征隊(広谷光一郎) 大阪大学 P 29

遠征隊(篠田軍治) 全日本山岳連一九六一年ヒマラヤ遠征隊(梶本徳次郎)

・小里頼忠(信濃支部)、牧野衛(静岡支部) 須賀太郎(東海支部) 今西寿雄(関西支部) 吉田竹志 佐藤久一朗、安彦六郎、藤島敏男 青木昇、吉田薫、塩見節夫、太田敬、松本熊次郎、藤木九三、茶谷東海、鈴木英一、近藤茂吉、坂本矩祥、皆川完一、村井米子、山口節子、富田美知子、諸岡一次、野口末延、佐藤隆太郎、竹田吉文、外山義夫、田村扇一、徳久球雄、深田久弥、牧野四子吉、牧野文字、榎有恒、折井健一、坂倉喜喜子、近藤等、関口周也、中保、武藤晃、工藤英司、川上隆、小原勝郎、山口一孝、木村碩志、高木菊三郎、木村利人、金坂一郎、石坂昭二郎、岡楚徳之助、ゴバル(ネパール国) 古沢肇、錦織保清、加藤幸彦、三田幸夫、村木潤次郎、岡村治信、加藤泰安、入沢文明、佐藤保男、中村保、交野武一、池田光二、森本智津子、細川沙多子、今井嘉道、見学玄、山崎安治、川喜田二郎、小泉満、田辺主計、長尾佛夫、岩佐吉雄、浜中慶子、日高信六郎、山下一夫、中島伊平、芳野超天、篠田一郎、織内信彦、松方三郎、小野利次、西丸震哉、川森左智子、松田雄一、辰沼広吉(以上九六名)

秋山歩き

越後支部 藤島 玄

福島支部伊藤弥十郎旦那は年寄りの早起きで最初、次は八郎淵をみて生保内泊りの私、何処から現われたか山形支部後藤幹次旦那を最後に秋田国体登山受付三人組の揃いとなる。私の名は受付名簿のどこにもない。こうした始末をうまく裁くのに近県支部の応援だ。開会式の花火で私の役目御免。さつさと青森行きに乗る。相棒は会員の井口正男。弘前からバスで岳温泉着。星空の下の共同浴場で、新潟より秋田、秋田より津軽の美人揃いにたまげてしまった。どうせ言語不通だ。スウェーデンだと思えばよい。こりや太宰の「津軽」を読みなおさねばなるまい。十月八日

「お知せ」と標準語で小学校附近へ熊が出た、午後から熊狩の貼紙津軽の熊はもう見ている。裾野の薄原を過ぎる頃、相馬大作の砲音下からドン。撫林が意外なほど続き二〇〇mで寝松がでる。捨て草鞋の散在する岩の重りの間に岩木山御室。龍飛崎の先に北海道の山々。風の冷たさを小屋に避けてから、鳥ノ海、錫杖清水と紅葉の中を馳け下る。百沢の東奥の日光岩木山神社、胴羽目のライオンに目をぼちくり。黒岩からバスで湯温泉へ。壮大な客舎と鬼の拳のようなホヤ。十月九日
小雨で明ける。大風雨白一色に荒れた十和田湖の龍巻き観賞。小便滝まで車を止めてのバスガールの悲しさ。車中の縄でも叩いたらよからうに。青森港は欠航。田名部からの荒涼たる下北半島の北海道風物。本州最北の下風呂温泉は、波の音のみ荒い夜だった。十月十日
田名部から恐山のバスは、行けどもつきぬヒバの純林を泳ぐように分ける。地獄の亡者が現われると、四十年も昔に父が語って聞かせた久恋の恐山湖は、立山の地獄谷より明るく、尾瀬が原より美しく、取り囲む青い山々は八葉の蓮華そのものだ。石仏の供物を失敬して、カメラに忙がしい。十月十一日
終戦直後の正月は、人一人いなかった中尊寺も、団体客のごったかえし。一ノ関から端山へバス。須川温泉着は夜になったが、途中の赤黒い鳥海山のシルエットは印象的だった。十月十二日
ひどい霧雨ではじめて雨具着装で出る。湯場から高山植物園は嬉しいね。黄色い広い原、白いカルデラ湖。ひとしきり霧を分けて登った栗駒山。これで、登り残した東北の山旅は一まず終了。満山の紅葉がようやく輝きをます。中央コースを茸とやり駒ノ湯へ。なんという親切な役場の人達である。二七軒は帰りのジープに便乗、行者ノ滝も玉山ダムも観た。仙台入りはもうネオンが明るかった。井口は上京、私は東五番町を一里も歩いて、国体登山帰りの宮城支部常盤一雄先生のお世話になった。十月十三日
それから、仙台の名所旧蹟の総てと松島まで伊達篤郎さんの案内をいただき、帰宅は十五日夜。



図書紹介

石井 鶴三

The Alpine Journal

(1961—1)

初登頂の記録はディスタギル・サールとトリヴォール山の二つ。カラコルムのヒスパー・ムスターグにあるこの二つの高峰が、同じ年に相ついで登頂されたのは興味がある。

エヴェレストへ北と南から同時に登った二つの記録も載っている。南からのインド隊は頂上の手前で敗退したが、北からの中国隊は登頂記である。さてはアルパイン・クラブもその登頂を認めたのかと思うと、さらにあらず、中国隊の記録や写真にいろいろ疑わしい点のあることを、編集者が附記している。どうやらこの附記が正しいように思われる。

ヒマラヤは流行の山になったから嫌だ、とうそぶくヘソ曲りのテイルマン。一たいどこへ出かけているのかと思うと、ケープタウンからずっと南の孤島へ小舟で行く。

て、その山へ登っている。世界的な登山家である。同伴者を求めるため新聞に出した三行広告が面白い。「給料なし、保証なしあまり楽しくもなし」それでも二十人の応募者があったというからさすがはイギリスだ。

×

アーノルド・ランが親友ジョフリー・ヤングの追悼(むしろ評伝)を書いている。人工的登攀を極度に嫌ったこの偉大な登山家の面目が躍如としている。

もう百年近く前に活躍したアルプスの名ガイド・ジャコブ・アンデレッグの伝記。三十年前の西チベットの旅行記。価値のある記事なら年代の新旧を問わず取上げる点も、このジャーナルの見識である。

×

巻末のアルパイン・ノートでは一九六〇年のサルトロ・カンリ遠征が目玉される。この山は一九三五年イギリス隊によって、頂上まであと一八〇メートルの地点まで達せられたが、その後一九五七年シブトン隊によって更に探索され今年度一九六〇年隊はその西面を偵察した。

今年京大士山岳会が目ざしている山だけに、この記事は興味深い。(K・F)

吉阪隆正著

原始境から文明境へ

アラスカ・カナダの旅

本書は山岳登攀(編者註、著者の吉阪隆正氏は一九六〇年、早大マツキンレー遠征隊の記録だけかと思うと、野獣、エスキモー、ゴールドラッシュ、開拓、あるいはアメリカの技術などにも言及する。ことにゴールドラッシュの今昔、盛衰など、旅日記の中に過ぎ去った当時をよく彷彿させる。そこでの観察眼も実に吉阪像らしい科学・芸術のミックスされたところがよく出てくる。

未知の地に限りない魅力をもつ著書、知識の未分化、総合性を身につけた吉阪氏の性格がよくにじんだ著作であって、一人の遠征観とみることにふさわしい。

(B6二四六頁・四八〇円・相模書房)

(渡辺操・一九六〇年明治大学アラスカ学術調査団長)

山の気象研究会編著

山の気象 第1集

登山者のための研究と記録

内容は各季節の主な山系の気象について具体的な例を引用し、これに天気図と対照した気象学的な解説をつけるという形式が採用されている。その引例の数も豊富であり、遭難時のくわしい気象解説だけでなく、山系に特有の気象現象の解説も付せられている。

山の気象に関する著書はきわめ



佐藤久一朗

会務報告

十二月理事会

七日・ルーム

日高会長、理事浜野、折井、太田、山崎、川上、金坂、田村、徳久、高橋、田辺、中島、古沢、監事野口、松本、藤島(越後支部長)岩佐(東京支部)

委任出席松方、木下マ議事と報告

①ガルトツェン募金結果報告(折井)

②第一頁報告の通り

単位 \$

各遠征隊とその要求額	単位 \$
京大 サルトロカンリ 四手井綱彦 13,404	\$
(5月~9月) (8名)	
北大 チャムラン 中野 征紀 10,724,35	
(3月~6月) (7名)	
日大 ムクト、ヒマール 石坂昭二郎 6,360,80	
(3月~6月) (4名)	
大阪大 P. 29 未 定 6,500	
(8月~11月) (4名)	
早大 南米 アンデス 塚本 茂樹 5,694,6	
(6月~10月) (6名)	
計 42,683,75	

日本山岳会に割当予想としては2万ドル以上は無理な模様。

- ②海外遠征について (日高)
 - ・十一月二十九日海外登山審議会を開いた結果、外貨の割当額と要求額に大きな差があるので一応白紙にもとし、十二月十日各隊の代表者に来ていただき話しあってもらう。(上掲表参照)
- ③静岡支部長後任について(折井)
 - ・日本山岳会としては、とり敢えず牧野 衛氏にお願いしたい。
- ④インド政府主催ダージリンにて行う「高所医学に関する研究会」(一九六二年一月五~七日)に本会より辰沼広吉医博を派遣する。
- ⑤山梨岳連懇親会に本会より沼倉寛二郎氏が参加する。
- ⑥ルーム、山荘基金寄附申込について (太田)
 - ・賛助会員をもうけ大口寄附をうけいれてはどうか、評議員が推選した個人及団体をうけるか、等について意見が提出された。
- ⑦ハウストン氏より山岳書(二、三〇冊)寄贈の申出あり、現物は四・五月ごろ送付される筈。
- ⑧近藤等会員(早大教授)のフランス国立登山学校入学について。
- ⑨福岡支部について
 - ・北九州支部をあらため福岡支部とする。
- ・支部長 末松 大助
- ・副支部長 高尾 徳繁
- ・顧問 岡田 喜一

て少ない。本書は其中で特に内容の充実したものであることは推選の言葉を惜しまない。

欲をいえば、本書は山岳気象の各論であるように思われるので、この第1集以後回を重ねて、最後には山岳気象の通論が出されるならば、登山家の益するところは、さらに大きくなるだろうと思う。

(A5一五六頁・四〇〇円・恒星社厚生閣)
 (大谷東平、大阪管区気象台台長)
 編者附記、以上二冊の書評は、昭和37・1・15週刊読書人より抄録転載しました

Himalayan Journal

Vol. 22

ヒマラヤン・ジャーナル第二十巻が、一九五九年、六〇年合併号として久しぶりに出た。これまでのものと表紙のデザインが変わっており、すっきりとした感じだ。

登攀報告および紀行十九篇というさすが充実した内容である。主な目次は

- ・一九六〇年のインド隊エヴェレスト報告(ギャン・シン代将)
- ・アマ・ダムラム一九五九年(エムリン・ジョーンズ)
- ・一九六〇年アンナプルナ第二峰(O・M・ロバート)
- ・ドーラギリ一九五九年(フリッツ・モラビック)
- ・ドーラギリ一九六〇年(クルト・ディーンベルガー)
- ・マツシャールブルム登頂(T・F

- ・フオルンベイン)
- ・ユーゴ隊トリスル山群遠征(A・クネバー)
- ・シッキム一九六〇年(V・R・インガー)
- ・インナー・ライン横断(A・デヴィス)
- ・カシミールおよびジャム測量、一八五五年から一八六五年(R・H・フイリモア)
- ・ヒマラヤの旅(深田久弥)
- ・ガネツシユ・ヒマールへの小遠征(P・J・ウォーレス)
- ・ボカラの東北(G・ジョーンズ)
- ・デステイギル・サール一九六〇年(グンター・スタウカー)
- ・トライバー登頂(W・ノイス)
- ・一九六〇年六一年におけるヒマラヤの科学および登山遠征(N・ハーデー)
- ・セントラル・ヒマラヤ高地旅行(A・B・モーディ)
- ・ノシヤック登頂(酒井弥二郎)

京大および深田隊の二つの日本隊の報告がとくに目につくのはいうまでもない。深田隊の報告はジャパン・クオーターリー一九五八年の四から転載したもの。インドのエヴェレスト隊の報告は、すでにアルパイン・ジャーナルの今年の五月号にのっているものと内容はほぼ同じだが、ギャン・シン代将はとくにインド登山界の将来に

ふれ、インドの若い登山者がわれわれの肩に立つて必ずいつかエヴェレスト登頂に成功するであろうと結んでいる。一九五九、六〇年とつづいたオーストリアとスイスのドーラギリの登攀報告も面白く

デーンベルガーによる簡潔な日記体の報告は、最近英訳本も出たアイゼリ隊長による正式報告書、(ドーラギリ登頂)とあわせよめば、酸素なしで第一次登山隊員六名が登頂した模様が、さらによく理解できよう。マツシャールブルムの登頂は米國、パキスタン合同隊によるもので、隊長ジョーベ・ベル以下そのメンバーの山歴はいずれもたいしたもの、登頂は一九六〇年七月六日に行なわれ、登頂者の一人マクゴワンは帰途途中日本に立寄っている。ユーゴ初

のヒマラヤ登山隊ステン・セルズニツク隊長以下七名の隊ははじめナンダ・デヴィおよびその主峰と東峰の縦走計画を目標したが入山許可が得られなためトリズル山群だけにしたという。

とかくの風評のあったというウオーレスのガネツシユ・ヒマールはランペール隊のルートをとり、一九六〇年五月三十一日その東峰に達したことが明らかにされている。追悼欄は、P・ギリオーネをグレゴリーがしるしている(山崎安治)

✓ 所属福岡県在住会員五十一名
 事務所・八幡市中央町SSスポート内(電6)三三六五
 (13頁、橋本三八氏報告参照)
 以上

一月理事・評議員会

十一日・ルーム

マ日高会長、松方副会長、理事渡辺、浜野、折井、太田、山崎、川上、金坂、村木、木下、徳久、田村、古沢、田辺、中島、監事野口、松本、評議員望月、神谷、深田、青木、永井(大分支部長) 岩佐(東京支部)

マ議事と報告

- ①登山遭難対策打合せ会の開催について (折井)
- ②期日 一月十三日午後二時
- ③場所 文部省第六会議室
- ④浜野 山崎が出席する。
- ⑤登山技術指導者講習会について (川上)

・本年度(一九六一年)講習会は第3年目に当り、今回を以て一応予定のコースを終ることになる。

参加範囲は中国、四國、九州の各県で、棄権は島根、高知、佐賀、鹿児島、福岡から追加申込があったのでこれを認めた。

テキストは一月中旬に出来上り、その他の準備も予定通り進んでいる。

③一九六一年度登山技術研究委員会のあり方について (川上)

・来る六二年度は、JACとして絶えずヒマラヤ登山を目標として装備、食料、技術並びに資料の整理調査を行いたい。そのため技術研究委員会はヒマラヤ委員会と連絡の下に各部門それぞれの活動を行うことが可能であると思われるので、こうした方向に進むことについて理事会の承認をいただきたい。(右についてヒマラヤ委員会に対しては、日高会長、折井理事から内容の説明をすることにして承認)

④会費値上について (太田)

・右については東京支部所属委員の会費と他の地方支部委員会費との均衡について考慮を要するので慎重に考えたい。(例、東京一六〇〇円、地方一二〇〇円)

・終身会費については常識的な線で考えていただきたい。

・なお原案を全国各支部長に送り、ご意見を承りたい。

⑤新年度役員について (折井)

・常務理事に一任する。

⑥山日記について (渡辺)

・六二年版山日記は三一、七〇〇部印刷、すでに関係先にも配布、一般の売行きも順調である。(二七、〇〇〇部位)

以上



……学生部の 動 き……

カッパ・上田哲義

☆第1回気象例会（7月5日）

◎主催校、都立大

◎場所、日大会議室

◎出席校、農大、立大、日大医学

部、武蔵工大、国学院大、日大

慈恵医大、外語大、東葉大、千葉

大医学部、成蹊大、上智大、電通

大、東大。

◎テーマ、今年度の気象観測方法

および方針。

☆第2回懇談会（7月15日）

◎主催校、日大、◎場所、JAC

ルーム◎出席校、学習院。

☆第3回懇談会（8月15日）

◎主催校、法大、◎場所、JAC

ルーム、出席校なし。

☆第4回懇談会（9月15日）

◎主催校、日大、◎場所、JAC

ルーム、◎出席校、専修大、慶大

東電大、法大、明大、◎講師日本

山岳会田辺寿。

☆第2回学生部リーダー会

◎期日、10月12日◎主催校、日大

◎場所、日大会議室

◎出席校、東洋大、国学院大、日

本女子大、千葉大医学部、拓大、

明大、東京理科大、東海大、都立
大、慈恵医大、法大、芝工大、教育
大、青山学院大、立大、日大医学
部、上智大、昭和医大、東電大、
電気通信大、順天大医学部◎講師
日本山岳会高橋進。

☆第5回懇談会（10月16日）

◎主催校、日大◎場所、JAC

ルーム◎出席校、理科大、東電大、

明大、昭和医大、学習院大、農大

東海大、拓大、都立大、青学大、

早大、東洋大、教育大、上智大、

◎講師日本山岳会山崎安治、金坂

一郎、中島伊平、高橋進、熊谷義

信。

☆第1回食糧例会（11月11日）

◎主催校、明大◎場所、明大学生

集会室◎出席校、千葉大、早大、

慶大、上智大、慈恵医大、東電大、

千葉大医学部、東海大、学習院大

日本女子大、理科大、芝工大、東

大、日体大、農大、教育大、電気

通信大、東葉大、中大、日大、武

蔵工大、拓大、明治学院大、東大

☆第6回懇談会（11月15日）

◎主催校、日大

◎場所、JACルーム。

◎出席校、慶大、東海大、青学大

専修大、学習院大、拓大、明大、

都立大、お茶の水大。

☆第2回気象例会（11月16日）

◎主催校、都立大。

◎出席校、慶大、日大、拓大、明

治学院大、防大、日本女子大、千

葉大医学部、電通大、東葉大、専

修大、成蹊大、東京女子大、農大

東電大、理科大、法大、芝工大、

明大、東大。

☆第1回医療例会（11月17日）

◎主催校、慈恵医大。

☆第1回遭難対策例会（12月5日）

◎主催校、慶大。

◎講師、日本山岳会高橋進、石坂

昭二郎、山崎安治、田辺寿、谷口

塚越。（以上担当・高橋進）

◇二八回小集会（現地）◇

一、日時 三月三〜四日

一、場所 宮城蔵王並びにかも

しか温泉白雲山荘

一、主催 宮城支部

多数ご参加をお待ちします

◇カラコルム便り◇

島 澄夫

御無沙汰致しました。七月以来

はや三ヶ月、各種学術調査、氷河

踏査ならびにクティ・ドルクシェ

（ククアイ氷河）五、八〇〇m峰

登頂も無事終り、ラホール、パン

ジャブ大学に寄留致しております

この小遠征がつつがなく完了で

きましたことは、会の皆様の御援

助の賜と拝し深く感謝致しており

ます。

（バキスタン、ラホールにて、

10月15日、松田雄一あて）

静岡支部報告

一月二十五日（木）支部総会を
開催、次の如く決定をした。

(1) 機構、昨年度前支部長退任

のまゝ、支部長の決定を見なか

ったが今般漸く、牧野衛氏に支

部長を御引受願った。尚、山本

明三郎氏が事務局を引受けるこ

とに決定する。

(2) 支部会員資格、三ヶ年以上会

費未納の会員は支部員名簿より

除外する。従って今後の通知、

連絡はしない。

(3) 日本山岳会ルーム、山荘基金

募集に協力の件、支部として取

組めをする。

(4) 月例会 月一回定例日（第二

土曜日、午後五時半より）静岡

市昭和町、竹中工務店四階ロビ

ーに於て、懇談形式で開催し、

会員相互の親睦を計る。

(5) 懇親山行。会員並びに家族の

参加を得て、年二回乃至四位

は実施する。取敢えず、春は寸

又川の大間温泉にてまた、夏は

中電知難山荘を予定する。

× ×

第二土曜日の月例会を「二土会」と名付け親睦を計ることにしまし

た。当地を御通過の節にはぜひお立

寄り下さい。

北部九州支部報告

橋本三八

昨年の集会で次年度は春に九重山ということに決まっていたが、つい永びいて去る十一月十五、十六日に九重山湯坪の大崩山麓八幡製鉄九重山荘で行った。登山は翌日涌蓋山から一目山の尾根歩きというところで、十五日は十八時まで集まり夕食後二十時から協議、懇談に入り二十一時に終った。その報告を以下に記すことにする。

一、北部九州支部改組、従来当支部の範囲は佐賀、大分、長崎、福岡としていたが本年になって大分に支部が承認されて発足したし今後佐賀、長崎にも支部が出来るようになれば北部九州の性格は失われるし、看板にいつわりありということにもなるので、この際福岡だけで支部を改組しようということになった。縮少のようなかたちではあるが会員数としては今後入会希望者もあることだし、福岡県内の気心のあった人達だけの方が却って親しみもあって、寧ろ発展性はあるということ、全員賛成決定して、昨年集会の九州支部構想の夢は破れたが、群雄割拠時代も歴史の一過程で止むを得ないという論は、そこがまた九州人らしいところだと爆笑、——でこの件は終る。

二、役員改選、長崎の岡田先生には気の毒だが一応辞任して貰って、副支部長であった末松氏を支部長に、副支部長には福岡市在住の高尾氏が選ばれた。以下の役員はなし。事務連絡は新しい事務所随時会員が立寄って、処理する。新事務所は八幡市中央町S・Sスポーツ(末松氏経営)なお前支部長岡田先生は福岡支部に加入されるという希望で、名誉顧問になっ

ていただくことになった。

三、ガルトゥン遺児救済基金募集、会員は既に応募されている方もあると思うが何分の援助をお願いする。

四、其他本部会費のこと。支部の費用(会費徴収せず)は他からねん出する。

以上和やかなうちに協議を終る。翌日十六日は涌蓋山——一目山の登山で九時半に山荘を出発する。

珍らしい好天気で、空には一片の雲もない青天井で、狐色の高原の色はつやつやとして九重の山歩きには最高の条件で一行はいよいよ和やかな気分高潮で、十二時に涌蓋頂上。九重連山が思いの外接近して、目に望遠レンズをつけたよう

だ、これは珍らしいと、それほどの秋空であった。阿蘇側には雲が長く棚引いていたがこれも画趣を却って添えるということで総てが満点。とうとう一時間を費してしまふ。それから緩やかな尾根も絨氈道でまったくのびのびとした山歩き、日頃忙しい仕事に追はれる一行も、今日ばかりは命が伸びたと一目山では一度美しい尾根道をなつかしんで筋湯に下る。十五時に筋湯に着き解散。

支部集會参加者、岡田、末松、高尾、月原、福永、仰木、秦野、三上、高場、小林、田中、石田、弥永、田代、阿部、馬場、橋本、外三名

○福岡支部事務所 八幡市中央町S・Sスポーツ内(電話③三〇九六番)

○支部長 末松大助 八幡市筒井通(電話③三三六五番)

○副支部長 高尾徳繁 福岡市浄水通五四ノ一(電話④三三三〇番)

○顧問 岡田喜一 長崎市長崎大

学水産学部

○福岡県在住会員数五一名(三十二年十一月現在)

東京支部会務報告

十二月六日支部理事会

一、八子ヶ峯スキー講習会打合せ
講習内容について安彦より説明

一、来年度会費値上げの件
一、一月理事会延期
一月十日(水)に行う。

△出席者 折井、野田、安彦、岩佐、中、加藤、関口、沼倉、山口、三枝

一月十日支部理事会
一、一月、第三水集會予定

今冬の山行、スキー行を中心
に新年茶話会を行う。

会費五〇円

一、支部懇親山行のための薬品類
常備の件

一、八子ヶ峯スキー講習会の最終
的打合せと準備。

△出席者 折井、野田、坂倉、加藤、中、関口、岩佐、三枝 以上

雲取山荘から

拜啓、雲取仙人(富田治三郎氏)が亡くなりました後、雲取小屋が秩父電鉄直営になりました。そして雲取山荘と名前が変り、昨年四月から私も住人として雲取山荘に入り、ほとんど自宅(秩父市)には帰らず、一ヶ月のうち二十五日は雲取山に居りますので、今後ともよろしく願ひいたします。

三十二年十二月二日

埼玉県秩父郡大滝村三峰山
局気付、雲取山荘

新井信太郎
(会員番号四三六七)

新井信太郎

新井信太郎

新井信太郎

答をしておきたい。

昭和三十五年十二月八日の理事
会兼評議員会の議事録によると、
藤島敏男評議員の発言として、
「山岳」にマナスル登頂の記録が
のっていないが、のせる必要がある
というのがある。

まことにもっともである。しか
し「山岳」51年には横有恒氏によ
る「マナスルの印象」という一文
がある。編集者山崎安治氏の意図
は、別に単行本も二冊、写真集も
一冊出ているのだから、これを以
てマナスル登頂の記事としたつも
りであつたろうと思う。その方針
の適否はとも角として、「山岳」
に全然等閑視された訳ではない。

また、登頂の時から大分年数の経
過した現在、しかも他にのせるべ
き原稿の多い現在、改めてマナス
ルの記録をのせるとしたら、例え
ば登頂者の思い出のような形式に
でもする以外には、そのまゝでは
時機を失したことになる。私と
してはその点を考え、お説はもっ
ともながらそのまゝにしていた。

また同じ時、藤島評議員の発言
に、ヒマラヤの情報をのせる必要
がある、というのがある。
これは、曾て二、三回実行した
ヒマラヤ・ノーツ欄のようなもの
で、過去一年間位の各国のヒマ
ラヤ登山の情報をまとめるという
御趣旨かと思う。これもそうあり
たい。しかし最近のように数が多
いと、新しい情報をめ切りに正

確に収集するには編集者一人の力
ではむづかしい。また最近では
「山日記」に毎号吉沢一郎氏が大
体そのようなことをのせている。

「山日記」と重複したくない気持
もあつて敢て積極的にならなかつ
た。しかし49年号にのせた年譜の
ようなものは是非つづけたと思
う。

昭和三十六年七月八日の支部長
会議の席上藤島玄越後支部長の発
言に、「山岳」にはヒマラヤ関係
のものばかりで日本関係のもの
がない、もっと日本関係のものも入
れるようにして欲しい、というの
があつた。

「山岳」は言う迄もなく日本の山
岳会の会誌であつて、アルパイン
・ジャーナルでもヒマラヤン・ジ
ャーナルでもないから、日本の山
の記事が載らないのはおかしく、
編集者として同様に強く希望して
いる。

しかし現在依頼原稿がなく、会
員或いは会員外から編集者へ（或
いは会へ）だまつても送付され
る原稿は殆んどない。日本の山を
扱った原稿は、研究にしろ紀行に
しろ、どこにそろしい材料が
あるのか甚だ判りにくい。むしろ
積極的な寄稿なり、或いは寄稿依
頼の示唆がほしいのである。編集
者から依頼する限り、最近のよう
に海外登山が盛んな時代には、そ
れに片寄ることもある程度やむを
得ないかと思う。

また特定人の意見ではないが、
何人かの会員から書評欄の復活を
希望されたことがある。

戦前の27年、28年号あたりは書
評欄が活潑で藤島、松方氏らが盛
んに書いておられた。今読んで
も実に面白い。まだ読んだことの
ない会員には、是非一読をすすめ
たい程である。しかし、会報の書
評欄が拡充されるにつれ、既に戦
前でも「山岳」の方は消極的にな
り、例えば木暮さんの「山の憶ひ
出」のような特別の本だけが取り
上げられていたように記憶する。

今日では年間に刊行される本の
数も多く、且つ海外の出版物まで
加えるとかかなりの量になるので、
それらのうちからどれを選択し、
誰れに書いてもらうか、それを現
在の編集者が一人でやるのでは、
誰れがやっても少し荷が重すぎる
であろう。編集スタッフの中で少
なくとも一人がそれを専門にやる
らしいことは必要である。むしろ
これを永続性あらしめるならば、
理事評議員のうち何人かでそうし
たスタッフをつくり、分担して新
刊書に目を通し、本人が書くなり
適当な人に書いてもらうようなし
きたりが、常時出来ていることが
望ましい。そのようなやり方が決
まれば、編集者としては是非この
欄をもうけていきたい。編集者一
人の肩に荷がかかるのでは、目下
原稿依頼、原稿の訂正、写真の割
付その他広告集めを除き一人で一

切やっている私には、到底やる自
信がないと云わざるを得ない。

×

最後に、「山岳」出版の費用のこ
とを述べて終りとする。私が編集
すると正直のところ毎号予算超過
のようである。この点会計担当の
理事に大いに迷惑をかけているの
でお詫びしなければならぬ。し
かし、私としては日本山岳会のお
かれていた位置（国内ばかりでな
く）最近の日本の登山界の活躍、
その他から考えて、最近刊行して
いる程度の会誌を出すことは是非
とも必要だと考えている。予算不
足の分は、たとえその仕事で面倒
だとしても広告の収入等による以
外にない。

予算内で上げるため頁数も思い
切つてへらし、写真もへらし、地
図もへらすようなら、たとえ苦勞
があつても他からの収入をはかっ
て現在程度の会誌をつづけるべき
ではなからうか。しかし、会誌は
個人の考えだけでやるべきでない
ことは勿論だから、この点は多く
の人々の卒直な意見をききたいと
思う。

近く56年号が刊行されるにあた
り、「山岳」についての意見、要
望等が数多く出ることを望んでベ
ンをおく。

（一九六一年十二月十日）

△カットは水バールの絵馬▽

— 佐藤久一明 —

（二七号訂正）

誤

1 頁1段 その間の

夏山歩きのうち

11 頁1段 尾根歩き

十二時 二時間

2 段 鳥川

2 段 月山東面

4 頁4段 本会は財

政は 本会の財政

11 頁1段 著書、田

辺和雄氏 著者、田

5 段 会費未納 会費未納

正

その間の当

会の幹旋

尾根歩き十

二時間

鳥川

月山東面

本会の財政

著者、田

和雄氏

会費未納

会費未納

編 集 後 記

木暮さんの歌をよむと、比較的けも

の歌の多いのに気がつく。それだけ

自然に近い山登りだったわけで、うら

やましい気がする。近年国内の山登り

は段々自然から遠ざかっていくように

思われるので、とくにその感がします。

昭和三十七年二月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

価額二十円

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技 報 堂